

日本産ツツジの節間雑種の育成 (要約)

山口 聡・平田良樹 (野菜・茶業試験場久留米支場)

Satoshi YAMAGUCHI and Yoshiki HIRATA : Breeding Pivotal Hybrid between Sect. Tsutsutsi and Sect. Brachycalyx Azaleas (Abstract)

日本産のツツジはヤマツツジ節とミツバツツジ節とに大別され、両節間の交配は容易には成功しない。今回10年前、ヒラドツツジ“天祥”にサクラツツジを交配して得られた唯一の雑種個体が、その後順調に生育を続け、開花に至ったので、その特性につき報告する。

1. 育成経過および外部形態

1976年ヒラドツツジ“天祥”にサクラツツジを交配した10花より発芽実生を得たので肥培に努めたところ、1986年春に7花を咲かせた。雑種の花は両親のいずれよりも小型で、淡い桃色をしており、淡紅色のガイドマークがよく目立っている。ガク片の形状は小型で円く、花粉親のそれに形が似ている一方、大きさは子房親の“天祥”との中間であった。花卉の厚みも平均親に近い値を示した。

雑種の葉は狭い披針形をしており、先端は鋭く、葉身は全体にゆるやかに波打っている。葉縁は外に反曲しがちであり、花粉親のサクラツツジの葉に似ている。葉色は、やや淡い緑色であり、これは子房親の“天祥”に似ている。雑種の葉には毛茸がごく少なく、白色であり、脱落しやすい。枝の毛茸は褐色をしており、両親の中間の色調であった。

子房表面の毛茸は白色であり、子房親の“天祥”に似ている。

2. 耐寒性および稔性

1985年秋から1986年春にかけて、露地植えのツツジ類の耐寒性を調査したが、本雑種の露地での花芽の被害率は42%であった。ツツジ全体として耐寒性弱に属する。花粉親のサクラツツジの花芽の被害率は0%、子房親のヒラドツツジ“天祥”のそれは47%であり、子房親に近い性質である。

本雑種の花粉稔性は0%で完全に不稔であった。両親のいずれとも、もどし交配を試みたが結果しなかった。本雑種は雌雄いずれの立場でも強い不稔性を示すことが判った。今後共、相互の節の橋渡し材料として本雑種を利用しようとするならば、何らかの方法で4倍体化し、稔性の回復を計ることが必要である。

本報告は1986年度秋季の園芸学会講演会にて発表したものの要約であり、その詳細は、野菜試験場報告、シリーズC (久留米) 9号に発表した。

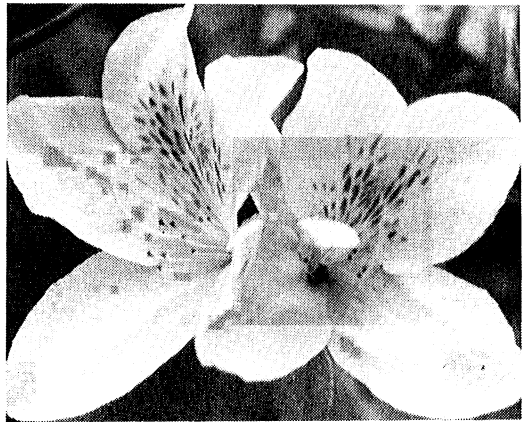


写真1 節間雑種の花 (ヒラドツツジ“天祥”×サクラツツジ)

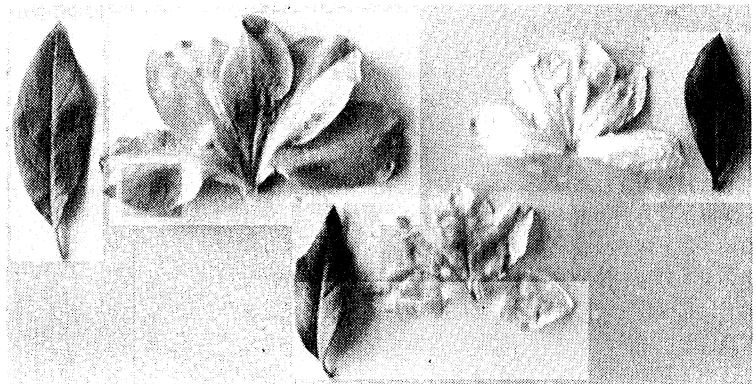


写真2 ヒラドツツジ“天祥”(左), 雑種(中央), サクラツツジ(右)の展開した花冠と葉の比較